

ある崖上の感情

梶井基次郎

青空文庫

ある蒸し暑い夏の宵のことであつた。山ノ手の町のとあるカフェで二人の青年が話をしていた。話の様子では彼らは別に友達というのではなさそうであつた。銀座などちがつて、狭い山ノ手のカフェでは、孤独な客が他所よそのテーブルを眺めたりしながら時を費すことはそう自由ではない。そんな不自由さが——そして狭さから来る親しさが、彼らを互いに近づけることが多い。彼らもどうやらそうした二人らしいのであつた。

一人の青年はビールの酔いを肩先にあらわしながら、コップの尻でよごれた卓子テーブルにかまわず肱ひじを立てて、先ほどからほとんど一人で喋しゃべっていた。漆喰しつくいの土間の隅すみには古ぼけたビクターの蓄音器が据えてあつて、磨り減つたダンスレコードが暑苦しく鳴っていた。

「元来僕はね、一度友達に凶星を指されたことがあるんだが、放浪、家をなさないという質たちに生まれついていらしいんです。その友達というのは手相を見る男で、それも西洋流の手相を見る男で、僕の手相を見たとき、君の手にはソロモンの十字架がある。それは一生家を持てない手相だと言つたんです。僕は別に手相などを信じないんだが、そのときは

そう言われたことでぎくつとしましたよ。とても悲しくてね——」

その青年の顔にはわずかの時間感傷の色が酔いの下にあらわれて見えた。彼はビールを
一と飲みするとまた言葉をついで、

「その崖の上へ一人で立つて、開いている窓を一つ一つ見ていると、僕はいつでもそのこ
とを憶い出^{おも}すんです。僕一人が世間に住みつく根を失って浮草のように流れている。そし
ていつもそんな崖の上に立つて人の窓ばかりを眺めていなければならない。すっかりこれ
が僕の運命だ。そんなことが思えて来るのです。——しかし、それよりも僕はこんなこと
が言いたいんです。つまり窓の眺めというものには、元来人をそんな思いに駆るあるもの
があるんじゃないか。誰でもふとそんな気持ちに誘われるんじゃないか、というのですが、
どうです、あなたはそうしたことをお考えにはならないですか」

もう一人の青年は別に酔っているようでもなかった。彼は相手の今までの話を、そうお
もしろがってもしないが、そうかと言って全然興味がなくもないといった穏やかな表情で
耳を傾けていた。彼は相手に自分の意見を促されてしばらく考えていたが、

「さあ……僕にはむしろ反対の気持ちになった経験しか憶い出せない。しかしあなたの気持
は僕にはわからなくはありません。反対の気持ちになった経験というのは、窓のなかにいる

人間を見ていてその人達がなにかはかない運命を持ってこの浮世に生きている。というふうに見えたということなんです」

「そうだ。それは大いにそうだ。いや、それがほんとうかもしれない。僕もそんなことを感じていたような気がする」

酔った方の男はひどく相手の言ったことに感心したような語調で残っていたビールを一口に飲んでしまった。

「そうだ。それであなたもなかなか窓の大家だ。いや、僕はね、実際窓というものが好きで堪^{たま}らないんですよ。自分のいるところからいつも人の窓が見られたらどんなに楽しいだろうと、いつもそう思ってるんです。そして僕の方でも窓を開けておいて、誰かの眼にいつも僕自身を曝^{さら}らしているのがまたとても楽しいんです。こんなに酒を飲むにしても、どこか川つぷちのレストランみたいなところで、橋の上からだとか向こう岸からだとか見ている人があつて飲んでいるのならどんなに楽しいでしょう。『いかにあわれと思うらん』僕には片言のような詩しか口に出て来ないが、実際いつもそんな気持になるんです」

「なるほど、なんだかそれは楽しそうですね。しかしなんという閑^{のど}かな趣味だろう」

「あつはつは。いや、僕はさつきその崖の上から僕の部屋の窓が見えると言ったでしょう。」

僕の窓は崖の近くにあつて、僕の部屋からはもう崖ばかりしか見えないんです。僕はよくそこから崖路を通る人を注意しているんですが、元来めつたに人の通らない路で、通る人があつたつて、全く僕みたいにそこでながい間町を見ているというような人は決してありません。実際僕みたいな男はよくよくの閑人なんだ」

「ちよつと君。そのレコード止してくれない」聴き手の方の青年はウエイトレスがまたかけはじめた「キャラバン」の方を向いてそう言った。「僕はあのジャZZというやつが大嫌いなんだ。厭^{いや}だと思ひ出すとても堪らない」

黙つてウエイトレスは蓄音器をとめた。彼女は断髪をして薄い夏の洋装をしていた。しかしそれには少しもフレッシュなところがなかった。むしろ南^{なん}京^{きん}鼠^{ねずみ}の匂いでもしそうな汚いエキゾティシズムが感じられた。そしてそれはそのカフェがその近所に多く住んでいる下等な西洋人のよく出入りするという噂^{うわさ}を、少し陰気に裏書きしていた。

「おい。百合^{ゆり}ちゃん。百合ちゃん。生をもう二つ」

話し手の方の青年は馴染^{なじみ}のウエイトレスをぶつきら棒な客から救つてやるといふような表情で、彼女の方を振り返つた。そしてすぐ、

「いや、ところがね、僕が窓を見る趣味にはあまり人に言えない欲望があるんです。それ

はまあ一般に言えば人の秘密を盗み見るという魅力なんです、僕のはもう一つ進んで人のベッドシーンが見たい、結局はそういったことに帰着するんじゃないかと思われるような特殊な執着があるらしいんです。いや、そんなものをほんとうに見たことなんぞはありませんがね」

「それはそうかもしれない。高架線を通る省線電車にはよくそういったマニヤの人が乗っているということですよ」

「そうですかね。そんな一つの病型タイプがあるんですかね。それは驚いた。……あなたは窓というものにそんな興味をお持ちになったことはありませんか。一度でも」

その青年の顔は相手の顔をじつと見詰めて返答を待っていた。

「僕がそんなマニヤのことを言う以上僕にも多かれ少なかれそんな知識があると思っていますでしょう」

その青年の顔にはわずかばかりの不快の影が通り過ぎたが、そう答えて彼はまた平気な顔になった。

「そうだ。いや、僕はね、崖の上からそんな興味で見る一つの窓があるんですよ。しかしほんとうに見たということは一度もないんです。でも実際よくだま瞞される、あれには。あつ

はっはは……僕がいつたいどんな状態でそれに耽^{ふけ}っているか一度話してみましようか。僕はながい間じいっと眼を放さずにその窓を見ているのです。するとあんまり一生懸命になるもんだから足許^{もと}が変^たに便^{たよ}りなくなつて来る。ふらふらつとして實際崖から落つちそうな氣持になる。はっは。それくらいになると僕はもう半分夢を見ているような氣持です。すると変なことに、そんなとき僕の耳には崖路を歩いて来る人の足音がきまったようにして来るんです。でも僕はよし人がほんとうに通つてもそれはかまわないことにしている。しかしその足音は僕の背後へそうつと忍び寄つて来て、そこでぴたりと止まつてしまうんです。それが妄想^{もうそつ}というものでしょうね。僕にはその忍び寄つた人間が僕の秘密を知っているように思えてならない。そして今にも襟^{えり}髪^{がみ}を掴^{つか}むか、今にも崖から突き落とすか、そんな恐怖で息も止まりそうになつてゐるんです。しかし僕はやつぱり窓から眼を離さない。そりやそんなときはもうどうなつてもいいというような氣持ですね。また一方ではそれがたいていは僕の氣のせいだということは百も承知で、そんな度胸もきめるんです。しかしやつぱり百に一つもしやほんとうの人間ではないかという氣がいつでもする。変なものです。あっはっはは」

話し手の男は自分の話に昂奮^{こうふん}を持ちながらも、今度は自嘲的なそして惡魔的といえる

かも知れない挑^{いど}んだ表情を眼に浮かべながら、相手の顔を見ていた。

「どうです。そんな話は。――僕は今もう実際に人のベッドシーンを見るということよりも、そんな自分の状態の方がずっと魅惑的になつて来ているんです。何故と言つて、自分の見ている薄暗い窓のなかで、自分の思っているようなものでは多分ないことが、僕にはもう薄^{うす}うすわかつているんです。それでいて心を集めてそこを見ているとありありそう思えて来る。そのときの心の状態がなんとも言えない恍惚^{こうこつ}なんです。いったいそんなことがあるものですかね。あつはつは。どうです、今から一緒にそこへ行つてみる気はありませんか」

「それはどちらでもいいが、だんだん話が佳境には入^いつて来ましたね」

そして聴き手の青年はまたビールを呼んだ。

「いや、佳境には入つて来たというのはほんとうなんです。僕はだんだん佳境には入つて来たんだ。何故^{なぜ}つて、僕には最初窓がただなにかしらおもしろいものであつたに過ぎないんだ。それがだんだん人の秘密を見るという気持が意識されて来た。そうでしょう。すると次は秘密のなかでもベッドシーンの秘密に興味を持ち出した。ところが、見たと思つたそれがどうやらちがうものらしくなつて来た。しかしそのときの恍惚^{こうこつ}状態そのものが、

結局すべてであるということがわかって来た。そうでしょう。いや、君、實際その恍惚状態がすべてなんですよ。あつはつは。空の空なる恍惚万歳だ。この愉快な人生にプロジツトしよう」

その青年にはだいぶ酔いが発して来ていた。そのプロジツトに応じなかった相手のコップへ荒々しく自分のコップを打ちつけて、彼は新しいコップを一気に飲み乾した。

彼らがそんな話をしていたとき、扉をあけて二人の西洋人がはいつて来た。彼らは入つて来ると同時にウエイトレスの方へ色っぽい眼つきを送りながら青年達の横のテーブルへ坐つた。彼らの眼は一度でも青年達の方を見るのでもなければ、お互いに見交わすというのでもなく、絶えず笑顔を作つて女の方へ向いていた。

「ポーリンさんにシマノフさん、いらつしやい」

ウエイトレスの顔は彼らを迎える大仰な表情でにわかに生き生きし出した。そしてきやつきやつと笑いながら何か喋り合つていたが、彼女の使う言葉はある自由さを持った西洋人の日本語で、それを彼女が喋るとき青年達を給仕していたときとはまるでちがつた変な魅力が生じた。

「僕は一度こんな小説を読んだことがある」

聴き手であつた方の青年が、新しい客の持つて来た空氣から、話をまたもとへ戻した。

「それは、ある日本人が欧羅巴^{ヨーロッパ}へ旅行に出かけるんです。英国、仏蘭西^{フランス}、独逸^{ドイツ}とずいぶんながいごつたごたした旅行を続けておしまいにウィーンへやって来る。そして着いた夜あるホテルへ泊まるんですが、夜中にふと眼をさましてそれからすぐ寝つけないで、深夜の闇のなかに旅情を感じながら窓の外を眺めるんです。空は美しい星空で、その下にウィーンの市が眠っている。その男はしばらくその夜景に眺め耽つていたが、彼はふと闇のなかにたつた一つ開け放された窓を見つける。その部屋のなかには白い布のような塊^{かたまり}りが明るい燈火に照らし出されていて、なにか白い煙みたようなものがそこから細くまっすぐに立ち騰^{のぼ}つている。そしてそれがだんだんはつきりして来るんですが、思いがけなくその男がそこに見出したものはベッドの上にほいままな裸体を投げ出している男女だったので。白いシーツのように見えていたのがそれで、静かに立ち騰^{のぼ}っている煙は男がベッドで燻^{くゆ}らしている葉巻の煙なんです。その男はそのときどんなことを思ったかというと、これはいかにも古都ウィーンだ、そしていま自分は長い旅の末にやっとその古い都へやって来たのだ——そういう氣持がしみじみと湧いたということです」

「そして？」

「そして静かに窓をしめてまた自分のベッドへ帰って寝たというのですが——これはずいぶんまえに読んだ小説だけれど、変に忘れられないところがあつて僕の記憶にひつかつている」

「いいなあ西洋人は。僕はウィーンへ行きたくなつた。あつはつは。それより今から僕と一緒に崖の方まで行かないですか。ええ」

酔つた青年はある熱心さで相手を誘つていた。しかし片方はただ笑うだけでその話には乗らなかつた。

2

生島（これは酔つていた方の青年）はその夜晩く自分おその間借りしている崖下の家へ歸つて来た。彼は戸を開けると、それが習慣のなんとも言えない憂鬱を感じた。それは彼がその家の寝ている主婦を思い出すからであつた。生島はその四十を過ぎた寡婦かふである「小母さんば」となんの愛情もない身体あきの關係を續けていた。子もなく夫にも死に別れたその女にはどこことなく諦あきらめた静けさがあつて、そんな關係が生じたあとでも別に前と変わらな

い冷淡さもしくは親切さで彼を遇していた。生島には自分の愛情のなさを彼女に偽る必要など少しもなかった。彼が「小母さん」を呼んで寢床を共にする。そのあとで彼女はすぐ自分の寢床へ帰ってゆくのである。生島はその当初自分らのそんな関係に淡々とした安易を感じていた。ところが間もなく彼はだんだん堪^{たま}らない嫌悪を感じ出した。それは彼が安易を見出していると同じ原因が彼に反逆するのであった。彼が彼女の膚に触れているとき、そこにはなんの感動もなく、いつもある白^{しら}らしい氣持が消えなかった。生理的な終結はあつても、空想の満足がなかった。そのことはだんだん重苦しく彼の心にのしかかつて来た。そのうちに彼は晴ればれとした往来へ出ても、自分に萎^{しな}びた古手拭のような匂いが沁^しみているような氣がしてならなくなった。顔貌にもなんだかいやな線があらわれて来て、誰の目にも彼の陥っている地獄が感づかれそうな不安が絶えずつきまとった。そして女の諦^{あきら}めたような平氣さが極端にいらいらした嫌悪を刺戟するのだった。しかしその憤^{ふん}懣^{まん}が「小母さん」のどこへ向けられるべきだろう。彼が今日にも出てゆくと云つても彼女が一言の不平も唱えないことはわかりきったことであつた。それでは何故出てゆかないのか。生島はその年の春ある大学を出てまだ就職する口がなく、国へは奔走中と言つてその日その日をまったく無氣力な倦怠で送っている人間であつた。彼はもう縦のものを横にするに

も、魅入られたような意志のなさを感じていた。彼が何々をしようと思うことは脳細胞の意志を刺戟しない部分を通じて抜けてゆくのらしかった。結局彼はいつまで経ってもそこが動けないのである。――

主婦はもう寝ていた。生島はみしみし階段をきしらせながら自分の部屋へ帰った。そして硝子窓^{ガラス}をあけて、むっとするようにこもった宵の空気を涼しい夜気と換えた。彼はじつと坐ったまま崖の方を見ていた。崖の路は暗くてただ一つ電柱についている燈がそのありかを示しているに過ぎなかった。そこを眺めながら、彼は今夜カフェで話し合った青年のことを思い出していた。自分が何度誘ってもそこへ行こうとは言わなかったことや、それから自分が執^{しつ}こく紙と鉛筆で崖路の地図を書いて教えたことや、その男の頑^{かたく}なに拒んでいる態度にもかかわらず、彼にも自分と同じような欲望があるにちがいないとなぜか固く信じたことや――そんなことを思い出しながら彼の眼は不知^{しらず}不識^{しらず}、もしやという期待で白い人影をその闇のなかに探しているのであった。

彼の心はまた、彼がその崖の上から見あふる窓のことを考え耽^{ふけ}つた。彼がそのなかに見る半ば夢想のそして半ば現実の男女の姿態がいかに情熱的で性欲的であるか。またそれに見入っている彼自身がいかに情熱を覚え性欲を覚えるか。窓のなかの二人はまるで彼の呼

吸を呼吸しているようであり、彼はまた二人の呼吸を呼吸しているようである、そのときの恍惚とした心の陶醉を思い出していた。

「それに比べて」と彼は考え続けた。

「俺が彼女に対しているときはどうであろう。俺はまるで悪い暗示にかかってしまったように白じらとなつてしまう。崖の上の陶醉のたとえ十分の一でも、何故彼女に対するとき帰つて来ないのか。俺は俺のそうしたものを窓のなかへ吸いとられていたのではなからうか。そういう形式でしか性欲に耽ることができなくなっているのではなからうか。それとも彼女という対象がそもそも自分には間違つた形式なのだらうか」

「しかし俺にはまだ一つの空想が残っている。そして残っているのはただ一つその空想があるばかりだ」

机の上の電燈のスタンドへはいつの間にかたくさん虫が集まつて来ていた。それを見ると生島は鎖をひいて電燈を消した。わずかそうしたことで彼には習慣的な反対——崖からの瞰下景に起こつたであろう一つの変化がちらと心を掠めるのであつた。部屋が暗くなると夜気がことさら涼しくなつた。崖路の闇もはつきりして来た。しかしそのなかには依然として何の人影も立つてはいなかった。

彼にただ一つの残っている空想というのは、彼がその寡婦と寢床を共にしているとき、ふいに起こって来る、部屋の窓を明け放してしまうという空想であつた。勿論彼はそのとき、誰かがその崖路に立っていて、彼らの窓を眺め、彼らの姿を認めて、どんなにか刺戟を感じるであろうことを想い、その刺戟を通して、何の感動もない彼らの現実にもある陶酔が起こって来るだろうことを予想しているのであつた。しかし彼にはただ窓を明け崖路へ彼らの姿を晒さらすということばかりでもすでに新鮮な魅力であつた。彼はそのときの、薄い刃物で背を撫でられるような戦慄を空想した。そればかりではない。それがいかに彼らの醜い現実に対する反逆であるかを想像するのであつた。

「いったい俺は今夜あの男をどうするつもりだつたんだろう」

生島は崖路の闇のなかに不知不識しらずしらず自分の眼の待つていたものがその青年の姿であつたことに気がつく、ふと醒さめた自分に立ち返つた。

「俺ははじめあの男に対する好意に溢れていた。それで窓の話などを持ち出して話し合う気になつたのだ。それなのに今自分にあの男を自分の欲望の傀儡かいらいにしようと思つていたような気がしてならないのは何故だろう。自分は自分の愛するものは他人も愛するにちがいないという好意に満ちた考えで話をしていたと思つていた。しかしその少し強制がまし

い調子のなかには、自分の持つている欲望を、言わば相手の身体にこすりつけて、自分と同じような人間を製造しようとしていたようなところが不知不識にあつたらしい気がする。そして今自分の待つていたものは、そんな欲望に刺戟されて崖路へあがつて来るあの男であり、自分の空想していたことは自分達の醜い現実の窓を開けて崖上の路へ曝さらすことだつたのだ。俺の秘密な心のなかだけの空想が俺自身には関係なく、ひとりでの意志で著々ちやくくと計画を進めてゆくというような、いったいそんなことがあり得ることだろうか。それともこんな反省すらもちやんと予定の仕組で、今もしあの男の影がすすこへあらわれたら、さあいよいよ舌を出すつもりにしていたのではなからうか……」

生島はだんだんもつれて来る頭を振るようにして電燈を点ともし、寢床を延べにかかった。

3

石田（これは聴き手であつた方の青年）はある晩のことその崖路の方へ散歩の足を向けた。彼は平常歩いていた往来から教えられたはじめての路へ足を踏み入れたとき、いったいこんなところが自分の家の近所にあつたのかと不思議な気がした。元来その辺はむやみ

に坂の多い、丘陵と谷とに富んだ地勢であつた。町の高みには皇族や華族の邸に並んで、立派な門構えの家が、夜になると古風な瓦斯燈の点く静かな道を挟んで立ち並んでいた。深い樹立のなかには教会の尖塔が聳えていたり、外国の公使館の旗がヴィーラ風な屋根の上にひるがえつていたりするのが見えた。しかしその谷に当つたところには陰気なじめじめした家が、普通の通行人のための路ではないような隘路をかくして、朽ちてゆくばかりの存在を続けているのだつた。

石田はその路を通つてゆくとき、誰かに咎められはしないかといううしろめたさを感じた。なぜなら、その路へは大つぴらに通りすがりの家が窓を開いているのだつた。そのなかには肌脱ぎになつた人がいたり、柱時計が鳴つていたり、味気ない生活が蚊遣りを燦したりしていた。そのうえ、軒燈にはきまつたようにやもりがとまつていて彼を気味悪がらせた。彼は何度も袋路に突きあたりながら、——そのたびになおさら自分の足音にうしろめたさを感じながら、やつと崖に沿つた路へ出た。しばらくゆくと人家が絶えて路が暗くなり、わずかに一つの電燈が足もとを照らしている、それが教えられた場所であるらしいところへやつて来た。

そこからはなるほど崖下の町が一と目に見渡せた。いくつもの窓が見えた。そしてそれ

は彼の知っている町の、思いがけない瞰^{かんかけい}下景であつた。彼はかすかな旅情らしいものが、濃くあたりに漂っているあれちのぎくの匂いに混じつて、自分の心を染めているのを感じた。

ある窓では運動シャツを着た男がミシンを踏んでいた。屋根の上の闇のなかにたくさん洗濯物らしいものが灰白^{ほの}く浮かんでいるのを見ると、それは洗濯屋の家らしく思われるのだつた。またある一つの窓ではレシーヴァを耳に当てて一心にラジオを聴いている人の姿が見えた。その一心な姿を見ていると、彼自身の耳の中でもそのラジオの小さい音がきこえて来るようにさえ思われるのだつた。

彼が先の夜、酔っていた青年に向かつて、窓のなかに立ったり坐ったりしている人びとの姿が、みななにかはかない運命を背負つて浮世に生きてるように見えると言つたのは、彼が心に次のような情景を浮かべていたからだつた。

それは彼の田舎の家の前を通っている街道に一つ見^み窄^{すぼ}らしい商人宿があつて、その二階^{てすり}の手摺^{あさび}の向こうに、よく朝など出立の前の朝餉^{あさけ}を食べていたりする旅人の姿が街道から見えるのだつた。彼はなぜかそのなかである一つの情景をはつきり心にとめていた。それは一人の五十がらみの男が、顔色の悪い四つくらいの男の児と向かい合つて、その朝餉の膳

に向かつているありさまだった。その顔には浮世の苦勞が陰鬱に刻まれていた。彼はひと言も物を言わずに箸を動かしていた。そしてその顔色の悪い子供も黙って、馴れない手つきで茶碗をかきこんでいたのである。彼はそれを見ながら、落魄した男の姿を感じた。その男の子供に対する愛を感じた。そしてその子供が幼い心にも、彼らの諦めなければならぬ運命のことを知っているような気がしてならなかった。部屋のなかには新聞の付録のようなものが襖の破れの上に貼つてあるのなどが見えた。

それは彼が休暇に田舎へ歸つていたある朝の記憶であつた。彼はそのとき自分が危く涙を落としてうになつたのを覚えていた。そして今も彼はその記憶を心の底に蘇らせながら、眼の下の町を眺めていた。

ことに彼にそういう氣持を起こさせたのは、一棟の長屋の窓であつた。ある窓のなかには古ぼけた蚊帳がかかつていた。その隣の窓では一人の男がぼんやり手摺から身体を乗り出していた。そのまた隣の、一番よく見える窓のなかには、箆笥などに並んで燈明の灯つた仏壇が壁ぎわに立っているのであつた。石田にはそれらの部屋を区切っている壁というものがはかなく悲しく見えた。もしそこに住んでいる人の誰かがこの崖上へ来てそれらの壁を眺めたら、どんなにか自分らの安んじている家庭という觀念を脆くはかなく思うだ

ろうと、そんなことが思われた。

一方には闇のなかにきわだつて明るく照らされた一つの窓が開いていた。そのなかには一人の禿^{はげ}顱^{あたま}の老人が煙草盆を前にして客のような男と向かい合っているのが見えた。

しばらくそこを見ていると、そこが階段の上り口になっているらしい部屋の隅から、日本髪に頭を結った女が飲みもののようなものを盆に載せながらあらわれて来た。するとその部屋と崖との間の空間がにわかに一揺れ揺れた。それは女の姿がその明るい電灯の光を突然遮^{さえぎ}つたためだった。女が坐つて盆をすすめると客のような男がぺこぺこ頭を下げているのが見えた。

石田はなにか芝居でも見ているような気でその窓を眺めていたが、彼の心には先の夜の青年の言つた言葉が不知不識^{しらずしらず}の間に浮かんできた。——だんだん人の秘密を盗み見するという気持が意識されて来る。それから秘密のなかでもベッドシーンの秘密が搜しなくなつて来る。——

「あるいはそうかもしれない」と彼は思った。「しかし、今の自分の眼の前でそんな窓が開いていたら、自分はその男のような欲情を感じるよりも、むしろもののあわれと言つた感情をそのなかに感じるのではなからうか」

そして彼は崖下に見えるとその男の言ったそれらしい窓をしばらく捜したが、どこにもそんな窓はないのであった。そして彼はまたしばらくすると路を崖下の町へ歩きはじめた。

4

「今晚も来ている」と生島は崖下の部屋から崖路の闇のなかに浮かんた人影を眺めてそう思った。彼は幾晩もその人影を認めた。そのたびに彼はそれがカフェで話し合った青年に
よもやちがいがいないだろうと思い、自分の心に企らんでいる空想に、そのたび戦慄を感じた。

「あれは俺の空想が立たせた人影だ。俺と同じ欲望で崖の上へ立つようになった俺の二重人格だ。俺がこうして俺の二重人格を俺の好んで立つ場所に眺めているという空想はなんという暗い魅惑だろう。俺の欲望はどうとう俺から分離した。あとはこの部屋に戦慄と恍惚があるばかりだ」

ある晩のこと、石田はそれが幾晩目かの崖の上へ立って下の町を眺めていた。

彼の眺めていたのは一棟の産科婦人科の病院の窓であつた。それは病院と言つても決して立派な建物ではなく、昼になると「妊婦預ります」という看板が屋根の上へ張り出されている粗末な洋風家屋であつた。十ほどあるその窓のあるものは明るくあるものは暗く閉とざされている。漏斗型じょうごがたに電燈の被おほいが部屋のなかの明暗を区切っているような窓もあつた。

石田はそのなかに一つの窓が、寝台を取り囲んで数人の人が立っている情景を解放しているのに眼が惹ひかれた。こんな晩に手術でもしているのだろうかと思つた。しかしその人達はそれらしく動きまわる気配もなく依然として寝台のぐるりに凝ぎようりつ立りつしていた。

しばらく見ていた後、彼はまた眼を転じてほかの窓を眺めはじめた。洗濯屋の二階には今晩はミシンを踏んでいる男の姿が見えなかつた。やはりたくさんの洗濯物が灰白く闇ほののなかに干されていた。たいていの窓はいつもの晩とかわらずに開いていた。カフェで会つた男の言つていたような窓は相不あいかわらず変見えなかつた。石田はやはり心のどこかでそんな窓を見たい欲望を感じていた。それはあらわなものではなかつたが、彼が幾晩も来るのにはいくらかそんな気持も混じつていたのだつた。

彼が何気なくある崖下ななげに近い窓のなかを眺めたとき、彼は一つの予感でぎくつとした。

そしてそれがまごうかたなく自分の秘かに欲していた情景であることを知ったとき、彼の心臓はにわかに鼓動を増した。彼はじつと見ていられないような気持でたびたび眼を外らせた。そしてそんな彼の眼がふと先ほどの病院へ向いたとき、彼はまた異様なことに眼を睜みはつた。それは寝台のぐるりに立ちめぐっていた先ほどの人びとの姿が、ある瞬間一度に動いたことであつた。それはなにか驚愕きょうがくのような身振りに見えた。すると洋服を着た一人の男が人びとに頭を下げたのが見えた。石田はそこに起こったことが一人の人間の死を意味していることを直感した。彼の心は一時に鋭い衝撃をうけた。そして彼の眼が再び崖下の窓へ帰ったとき、そこにあるものはやはり元のままの姿であつたが、彼の心は再び元のようではなかつた。

それは人間のそうしたよろこびや悲しみを絶したある厳肅な感情であつた。彼が感じるだろうと思つていた「もののあわれ」というような気持を超した、ある意力のある無常感であつた。彼は古代の希臘ギリシヤの風習を心のなかに思い出していた。死者を納いれる石棺せつかんのおもてへ、淫みだらな戯れをしている人の姿や、牝羊めひつじと交合している牧羊神を彫りつけたりした希臘ギリシヤ人の風習を。——そして思つた。

「彼らは知らない。病院の窓の人びとは、崖下の窓を。崖下の窓の人びとは、病院の窓を。

そして崖の上にこんな感情のあることを――」

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「文芸都市」

1928（昭和3）年7月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utyama

校正：多村栄輝

1998年11月17日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ある崖上の感情

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>